

『自由と愛の精神——桃山学院大学のチャレンジ——』刊行に寄せて

橋を架ける

学院長・日本聖公会大阪教区主教 磯 晴久

『自由と愛の精神——桃山学院大学のチャレンジ——』刊行、おめでとうございます。桃山学院大学の建学の精神は、「自由と愛のキリスト教精神による人格の陶冶」と「世界の市民の育成」であります。この建学の精神の具現化のために、一九五九年の開学以来、教員、職員、学生によって様々な取り組みがなされてきました。また、自由とは何か、愛とは何か、世界の市民とは何かなどを巡って、その現代的な意味を求めて、問い直しや再解釈の試みが繰り返し行われてきました。今回、学院に関係する多才な研究者によって、更なる探求がなされ、桃山学院全体の学問・研究・教育活動にどのような広がりや深化、影響をもたらすか、大いに期待するところであります。

i
私が桃山学院大学の「建学の精神」を見つめて、まずすばらしいと感じますのは、「人格の陶冶」という言葉に込められた人間観、教育観です。桃山学院大学の教員・職員は、学生一人ひとりをどのように見ようとしているかが明らかにされています。「陶冶」ということは、「人間には、天賦の才、天から、キリスト教で言うところから、いろいろ

ろな才能や能力を与えられている。そうした可能性にあふれた人を、丁寧にに陶器を作り上げていくように、はぐくみ、育てあげ、大きな実りをもたらす」という意味の言葉であります。桃山学院大学のスタッフは、そのような教育活動を行いますという決意が述べられています。

想像して頂きたいのですが、学生一人ひとりが植木鉢を抱えています。そこには可能性の種が植えられています。もちろん可能性の種は、一つではありません。沢山の可能性の種が植えられています。しかし豊かな生命力を内包する種ですが、放っておいては、芽を出しません。水、栄養豊かな土壌、太陽の光が必要です。桃山学院大学には、学生にとって水、栄養豊かな土壌、太陽の光となるものが沢山用意されています。熱い思いをもったすぐれた教員や職員がいます。そして可能性の種が芽を出すためのいろいろな仕掛けが、大学のあちらこちらにちりばめられています。そうした大学ですとの自己紹介がなされているのです。

そして、「自由と愛の精神」です。そのことについて思いを巡らしております、ふと思いついた新聞記事がありました。それは、二〇一五年一月一二日の朝日新聞デジタル版にあった記事です。少し長い引用になりますがお赦してください。「壁と向き合う橋——武蔵野美大と朝鮮大学の学生ら制作——壁は確かにそこにある。でも、向こうにいる相手と対話したい——。東京都小平市にある武蔵野美術大（武蔵美〈むさび〉）と、隣接する朝鮮大学校（朝大）の両校の学生らが、敷地の境界にある一枚の壁に「橋」を架けるアートプロジェクトを完成させた。……橋は木製の階段状で、コンクリートの壁の両側に制作。両校での合同美術展、突然、目の前がひらけての期間中、橋を渡り双方の会場を行き来できる。武蔵美のA教授、同校の卒業生を含む学生三人と、朝大の学生二人が企画した。朝大は、在日朝鮮・韓国人の子弟への教育を行っている。一緒に橋を作る中で、日本と在日社会を隔てる壁とは何か、皆で対話し考えたかった」と武蔵美メンバーのHさん（二五）は話す……。」

私は若者たちの感性のすばらしさに、深い感動を憶えました。話し合いの中では、壁を取り壊そうという声もあつたそうですが、壁はある、民族、歴史、文化など、確かに壁はある、それよりも橋を架けようという提案が朝鮮大学の女子学生からあつたといえます。

今世界は、対立と排除、排外的な動きが強まっています。アメリカ大統領予備選挙でも、声高に他国との間に「壁を作ろう」という主張に、歓声が挙がっています。本来、神と人、人と人、人と生きとし生けるものすべてをつなげる働きをするべき宗教が、テロや争い、排除の正当化に利用されています。このままでは、本当に第3次世界大戦に突入するのではないかと、わたしは恐れを抱きます。死の支配する世界に突き進んでいくのではないかと心配です。今の時代に大切なのは、若者たちが示してくれた対話と異質なものを何とかがして理解しようと「橋をかける心」ではないでしょうか。桃山学院大学の「自由と愛の精神」を生きたことは、言い換えると、「橋をかける」心を生きたと、いつていいのではないのでしょうか。

桃山学院のバックボーンにあります聖公会という教会は、「ブリッジ・チャーチ」(橋渡しの教会)「ブロードチャーチ」(幅広い教会)というアイデンティティを大切にしてきました。混迷を深めるこの世界にあつて、「橋渡し」の「役割を担い、多様なものを「幅広く」許容していこうとすることは、大変重要なことでもあります。

最後に、「世界の市民」の育成について触れて、私の巻頭の言葉とさせて頂きます。先日台湾聖公会からの招きで、台北に行つて参りました。そこでわが大学の建学の精神を具現化するプログラムの中で育つた卒業生と会い、一献傾ける機会がありました。彼は日本語の教師として、台北で働いています。彼はこれからの自分の役割は何かを真剣に考えていました。わたしたちの結論は、「橋を架ける」役割ということになりました。台湾と日本、アジアの国々と日本に橋を架ける人になりたいということです。国と国。民族と民族だけでなく日本社会におきましても、うまくつ

ながっていないものが沢山あります。そうした世界・社会にあつて、橋を架ける役割を担う人材の育成、それが「世界の市民」の育成ではないでしょうか。

本書が桃山学院大学の更なる発展と教育・研究活動の深化につながりますよう、神の導きをお祈りいたします。

自由と愛の精神——桃山学院大学のチャレンジ——

目次

巻頭言 『自由と愛の精神——桃山学院大学のチャレンジ——』刊行に寄せて…………… i

第I部 「自由と愛の精神」と「世界の市民」——建学の精神の具現化に向けて…………… 1

第一章 イエスにおける「自由と愛の精神」…………… 2

はじめに 2

A 自由 4

第一節 イエスの「権威」 4

第二節 ユダヤ教からの自由 7

第三節 ローマ帝国からの自由 8

B 愛 11

第四節 汝の敵を愛せ！ 11

第五節 「善いサマリア人」の譬え 12

第六節 困窮者たちへの愛 14

おわりに 21

第二章 人間として世界に立つ——「自由と愛」の精神に根ざして、「世界の市民」を養成する——…………… 25

はじめに 25

第一節	人間として世界に立つ——「世界の市民」——	27
第二節	世界の有りようとしての文明と「世界の市民」	28
(一)	文明——社会の有りよう、あるいは姿としての文明——	28
(二)	文明と商行為 (Commerce)	29
(三)	企業文明	31
(四)	文明の頹落と「世界の市民」	32
(五)	企業文明と「世界の市民」	34
第三節	自然的世界と人間の尊厳——「世界の市民」の立つべきもう一つの世界——	38
おわりに		39
第三章	建学の精神から文明の精神へ……………	44
第一節	建学の精神・地域再生構想・実践	44
	はじめに	44
(一)	建学の精神と南大阪再生構想をつなぐ	45
(二)	建学の精神と国際貢献・社会貢献基金をつなぐ	51
(三)	建学の精神と世界の市民——理念とプログラム——	53
第二節	建学の精神から文明の精神へ	53
(一)	研究者としての時代認識	53
(二)	新たな文明のひな形としての社会的経済	58

第四章 大学教育改革と「建学の精神」具現化の方向性——桃山学院大学の可能性を展望する——…… 64

はじめに 64

第一節 大学教育改革と個性化 65

(一) 大学教育改革の歴史社会的文脈性 65

(二) 大学教育改革の現状と問題点 68

(三) 個性化への課題 70

第二節 桃山学院大学と「建学の精神」の具現化への動き 72

(一) 個性化への仕組みと活性 72

(二) 「世界市民科目」の創設とその特徴 75

(三) カリキュラム改革及びその運営と残された課題 77

第三節 桃山学院大学の可能性の基盤とその展望 79

(一) 「自由と愛の精神」の解釈と共有化の必要性 79

(二) 「自由と愛の精神」と「世界の市民」の解釈への幾つかの留意点 81

(三) 「世界の市民」の哲学的射程と教育研究の課題 83

おわりに 86

第II部 愛の諸相——「自由と愛の精神」の広がりや深みを求めて——……………93

第五章 「神と人への表裏一体の愛」の検証、およびその実現に向けての考察……………94

はじめに 94

第一節 神への愛 96

第二節 隣人を自分のように愛する 101

(一) 普遍的隣人愛への変遷 101

(二) 普遍的隣人愛の解釈 107

(三) 普遍的隣人愛の神秘性とその可能性 108

(四) 別の視点から希求する普遍的隣人愛 114

おわりに 115

第六章 愛の概念と「相関」の方法——テイリツヒ神学におけるアガペーとエロース——……………123

はじめに 123

第一節 テイリツヒ神学の構造とアガペー・エロース関係 124

第二節 「相関の方法」とアガペー・エロース関係 128

第三節 愛の概念とアガペー、エロースの位置付け 132

おわりに 138

第七章 キルケゴールにおける自由と愛の問題……………141

はじめに 141

第一節 キルケゴールにおける義務と良心 143

(一) 自己愛と隣人愛 143

(二) 義務と良心 146

第二節 カントにおける義務と良心 148

(一) 道徳法則と定言命法 149

(二) 義務と良心 150

おわりに 152

第八章 東京からのLGBT発信の諸問題——「愛する権利」を誠実に問い続けてゆくために……………159

はじめに (キリスト教とLGBT人権回復活動) 159

第一節 東京からのLGBT発信の諸問題 160

(一) 経済的価値(魅力)と外見的価値(魅力)のアピール 160

(二) 障害者のノーマライゼーションを阻害する危険性 161

(三) 障害者・貧困者・弱者の社会的排除を助長する危険性 163

第二節 アライ概念をめぐるキリスト教的な寄り添いの可能性 164

(一) 論理的責任の共有 165

(二) 歴史的責任の共有 166

おわりに（スイス憲法前文に学ぶ） 167

第九章 体験活動をもたらす道徳的価値としての「愛」

——「インド異文化・ボランティア体験セミナー」に学ぶ——

はじめに 173

第一節 「I THIRST」の叫び 174

（一）「私は渇く」とは 174

（二）精神的な豊かさの喪失 175

（三）自尊感情の低傾向が示す危機 176

（四）体験を生かした人間形成 177

第二節 体験活動をもたらすもの 178

（一）学校教育現場における実情と課題 178

（二）「道徳的価値」への気づき 179

（三）「ふりかえり」による内面化 180

（四）深まる自己理解と他者理解 181

第三節 「インド異文化・ボランティア体験セミナー」からの学び 182

（一）マザーハウスでのボランティア活動に同行して 182

（二）深い共感をもたらす体験 183

（三）見いだせた新たな人生観 184

	(四) 持続する体験を通じた学び	185
第四節	豊かな心を育むために	186
	(一) 「ロールプレイ」による追体験	186
	(二) ノンフィクションを生かした道徳の時間	187
第五節	「持続可能な開発のための教育」を創る	188
	(一) 「愛」の精神とのかかわり	188
	(二) 「違い」を乗り越えて	189
	(三) これからの学校教育への期待	190
付録		210
あとがき		211